

アフリカと私

●杉山 隆彦

(国際協力事業団国際協力総合研修所国際協力専門員)

1969年4月、私はタンザニアのダルエスサラーム空港に降り立ちました。アフリカ生活の始まりでした。以来、25年弱をタンザニア及びケニアでアフリカ人青年の教育に携わってきました。私が、何故、こんなに長くアフリカの地に係わったかを自問しますと、色々な要因があるようです。一つは、アフリカの自然です。二つ目にはアフリカ人の有するホスピタリティだと思います。三番目が、多分私の生き甲斐につながったと思いますが、独立後混沌とするアフリカ社会には私が仕事をする場があったことだと思います。

自然に関しては、既に多くの人が魅せられ、各所で語られているとおりです。私は、アフリカ人のホスピタリティに助けられ、今日まで来ることができたのだと思います。とにかく言葉も満足に通じない私に、辛抱強く時には励まし、或いは慰めて独り立ちできるようにしてくれたことです。その間、時には家に招いてくれたりして、アフリカ人とその生活について教えてくれました。そこで見た彼等の生活は、一生懸命近代化しようとしている姿でした。近代化という言葉については、異論のあるところですが、私は、パンドラの箱が開けられたと思い、その是非を問うというよりホスピタリティに対する返礼として、アフリカ人の望む方向にできるだけ力を貸そうと思ってきたようです。

教育の場に、まさに私の仕事の間があったのです。私は、応用科学出身でしたので、理論を実験を通して実証することができました。これは、当時のアフリカでは新鮮な学問でしたし、国のリーダーの人造りスローガンに適合するものでもあって、多くの若い人々から教示を請われるようになり、その期待に応えねばならぬとがむしゃらに頑張ったのだと思います。

振り返りますと、多くの生徒や教員を育てることができました。同窓会制度の馴染みの薄い国々ですので、全ての動向を把握することはできませんが、それらの人々は各所で活躍しているようです。

しかし、現在、私を育ててくれたそれらの国々は、出口のないトンネルに入ったように、政治・経済・社会的に混迷しているのは周知の通りです。再び、彼等の力になりたいと、1998年初頭に当たり意を決しているところです。

近い将来皆で“アフリカ・ジュウ”(アフリカ万歳)と言える日が来ることを念じつつ。